

かたりべ 14

豊島区立郷土資料館だより



南蔵院境内



明応五年弥陀板碑(南蔵院蔵)

古碑の由来を尋ねて

今から一七〇年ほど前の文化年間、下高田村南蔵院を訪れた江戸の文人津田敬順(十方庵)は、徳川家光の御手植と伝えられている梅木「鶯宿梅」のかたわらに不思議な古碑がならんでいるのを見つけました。

「何れも石の色は青く性堅くして……石工の手際、今とは大に異にして、古雅に見えし」

と敬順は書き残しています。好奇心ゆたかな敬順は、寺の和尚に尋ねました。

「古碑に由緒ありや」

当時の南蔵院の住職は、昔から境内にあったけれども、言い伝えはありませんと答えています。これを聞いた敬順は、由来のわからないのもまた古風だと思い、

「さすがは田舎の木の端炭の折し如く、風雅なきも却て一品ありて面白し」と感慨をのべています。

江戸の文人が魅せられた「青き板石の古碑」は中世の供養塔板碑です。江戸時代になると、なぜか造られなくなってしまった中世の象徴のような文化財板碑。

三月四日(三〇日)、当館では板碑の特別展を開いています。是非、古碑の由来をお尋ね下さい。

「中世の大掃除」

現在豊島区に伝わっている板碑のうち、その大半は、江戸時代後期以後のある時点で、地中より掘り出されたものである。

たとえば、長崎地区の場合、金剛院の板碑は、昭和初年に線路脇の低湿地から出土したものであり、山上家の多数の板碑も、同家の家墓の地（大日堂）建て替えの時に集められたものという。重林寺の板碑も、もとは長崎地区から出土したものだし、巽家旧蔵のものも、谷端川分流より出てきたものに他ならない。

今、とげぬき地蔵のガラスケースの中におさめられ展示されている画像板碑は、江戸時代の後期に境内より掘り出したものだった（当時の高岩寺は下谷上車坂町にあった）。与芝家の板碑は、農作業のあいまに同家の畑の中から三つ折りになってみつかったものという。石川家の勧請稲荷社中出土板碑またしかりである。

中世の始まりとともに造立されはじめた板碑は、中世の終焉と共に姿を消し、近世になると全く造られなくなってしまう——「中世東国の象徴」であるということは度々強調してきた。

それだけではない。近世の訪れとともに、地中深く埋められ、廃棄され、抹消されていたので

ある。ある研究者は、この現象を「中世の大掃除」と呼んでいるが、言いえて妙な表現だろう。埋められた、また埋まっている板碑が、河川改修や堂舎たてかえ、農作業のおりおりに、少しづつ姿をみせてくれているのだ。

板碑のたつ風景

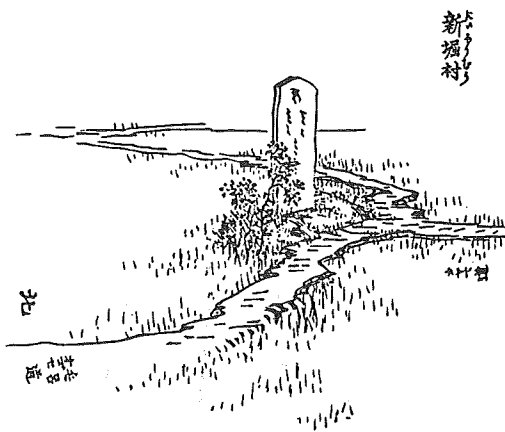
中世にあげただけたくさん造立された板碑が、なぜ、廃棄されたのか。定説は得ていない。徳川氏の関東入部によって土着の信仰は忌避された、石工が全部江戸城下に集められた等々、政治的理由にもとめる見解もあった。けれども、村の秩序や宗教意識など、社会的諸条件の変化が要因であるに相違ない。

ここでは、このような歴史的考察ではなく、近世の人々が板碑をどのように見ていたのか、どのように扱われたか——近世社会のなかの板碑を追求していきたい。

左の表は、『武蔵野話』『遊歴雑記』という文化年間の二つの地誌から、板碑についての記事をピックアップしたものである。江戸近郊における一九世紀前半における板碑の扱われ方の一端がうかがわれよう。全一〇七基の板碑が記され、その多くが図入りで紹介されていて興味深いのだが、その中の約三割にあたる三六基は地

中より出土したものであるという。出土地は、畑や宅内・寺内、または江戸城石垣中などが、これらの大半は、寺や家墓・個人宅などに移管されている。

某氏の墓と伝承され墳墓の地に建てられる場合（墓碑）、由緒不明のまま境内に祀られている場合とが圧倒的に多いが、往還の辻や分岐点（三例）、「武敗と屋敷分との交」（高安寺）など、少数ながらも境界の地に建て置かれていたものも見出せる。板碑・宝篋印塔・五輪塔など石造物を、その様式分類や形態編年でなくて、



新堀村

● 『遊歴雑記』

郡	村	在 所	基数	立 地	原 状
豊島	稲 村	清 勝 寺	1	墓 標	境内出土
豊島	高 田	南 藏 院	3	境 内	
(府内)	上 野	光 岩 寺	2	境 内	
豊島	下赤塚	下赤塚百姓家	1	往 還 辻	
(府内)	浅 草	法 源 寺	15	墓 標	
(府内)	浅 草	浅 草 寺	2	境 内	
足立	宮 城	性 翁 寺	1	墓 標	
豊島	豊 島	豊 島 明 神	2	境 内	
豊島	巢 鴨	庚 申 塚	1	宿 境 辻	
(府内)	浅 草	長 延 寺	1	境 内	
(府内)	飯 田	清 水 門 脇	9	普 請 場	石垣内出土

● 『武蔵野話』

入間	野老沢	観 音 院	6	境 内	境内出土
入間	久 米	将 軍 塚	1	塚 山	
入間	勝楽寺	石 川 家	1	畑	
入間	勝楽寺	中 山 家	10	畑 5 墓 5	
入間	勝楽寺	高 橋 家	1	畑	
入間	勝楽寺	木 下 家	3	畑	
入間	勝楽寺	七 社 権 現	2	境 内	
入間	難波田	西 蔵 院	4	墓 地	
入間	下新居	熊 野 社	1	墓 地	
新座	野火止	平 林 寺	1	境 内	
新座	引 又	田 子 山 塚	1	塚 上	境内出土
高麗	新 堀	往 岩 殿 観 音	1	路 傍 内	境内出土
秩父	我 野	岩 殿 観 音	2	洞 窟 内	
入間	野老沢	斎 藤 家	1	宅 内	
入間	野老沢	斎 藤 家	18	宅 内	
入間	堀 内	来 迎 寺	1	門 前 畑	
入間	苦 林	福 寺	1	川 沿 内	
入間	寺 尾	勝 寄 福 寺	3	境 内	
入間	宮 寺 坊	木 宮 寺	2	境 内	
入間	打 越	西 地 福 寺	1	境 内	
新座	白 子	岡 崎 福 家 寺	1	境 内	
埼玉	中曾根	岡 崎 福 家 寺	2	宅 内	
多摩	村 山	真 称 明 寺	1	境 内	近所掘出
多摩	布 太	高 安 寺	1	境 内	
多摩	布 太	高 安 寺	1	屋 敷 境 内	
多摩	本 宿	弥 鞞 寺	1	境 内	

同時代の人々による扱われ方を尺度に分類して
 みることによつて、その時代の歴史認識・空間
 認識を把握することが可能になると思う。近世
 社会のなかの板碑——近世地誌の目的意識的利
 用は、こうした手がかりを与えてくれるに相違
 ない。
 いうまでもないことだが、こうした方法が、
 中世本来の板碑の属性を明らかにすることは
 無縁であることは確認しておきたい。

中世への憧憬

巻頭ページにも登場してもらつた津田敬順は、
 板碑の石材の美しさ、彫り様の手ぎわのみごと
 さをほめたたえ「青き板石の古碑」に強く魅せ
 られている。興味深いのは、「石材の緑泥片岩に
 関する知識が乏しく、「伊子の青石などいふ類」
 などと記していることだろう。斎藤鶴磯の方は、
 さすがに秩父産の石という認識はしているもの

の、「今なき所の石なり」「土人この石を秩父
 石といへども今秩父に見侍らず」と書いている。
 かつて数万の板碑が造立された武蔵野周辺では、
 江戸時代になると青石製石造物は所在もおぼつ
 かないほど完全に姿を消したのである。江戸の
 人々は、「古雅なる絶倫」な青石の古碑に、遠
 く失なわれた過去、中世の異風の薫りを感じて
 いたのである。
 人々がみたのは中世のいのりの心とその造形

であったか。それだけではない。敬順は、清水門付近の崩れた石垣中から出た「青き板石」をみて、書いている。

「今の世は無縁の石碑をば石垣にし、又は堰越の小溝等へわたせるに、古は不用の碑ゆえ土中へ深く埋めたるは古雅といふべし」

中世人が敬順の考えた理由で、板碑を地中に戻したのかどうか、私たちに確かめるすべはないけれども、江戸の都市に生きた知識人が、自分たちが失ってしまった「古雅」の心をもつ過去の人々に対して、惜しめない愛惜の念を感じていること。さらには、ものをいづくしむことを忘れ、「便利な生活」の名の下に文化財を破壊してしまう江戸時代の都市生活に疑問をいだいていること。その相対化の要に、理想化された中世社会があること。——等々をよみとることは許されると思う。

『武蔵野話』の鶴磯は、「古代の風」を伝える赤塚村の田遊びを見て、「今時の人の心持にては馬鹿らしきこと、いはんなれども古風の体を失はずして執行こと貴きこといふばかりなし」と書いた。この時代は、都市化・合理化の風のなかで、人々が中世への憧憬を深め、それを礎にして「文化財保護」を自覚化していく時代であった。

(二月十三日、自肅の下での赤塚田遊び帰路)

一九八八年度の事業について

郷土資料館では、夏の特別展以降、文化財の仕事が大変になり、事業計画を大幅に変更しました。その中で、二回目の特別展は、時期を冬から春にずらして実施しました。そのため、講座・刊行物などが大幅に取り組みなくなりました。

講座では、地域史講座は五月七日から六月一日にかけて五回にわたって開催した。「中世文書の見かた・調べかた―豊島・宮城文書を読む」と八月六日から九月一七日にかけて六回にわたって開いた「池袋・わかものたちの演劇活動」とを予定どおり実施しました。しかし歴史講座は半分に縮少し、一〇月三〇日から十一月二七日にかけて四回開かれた「中世城館を歩いてみよう」と一九八九年二月一八日の「江戸の文化と女性」のみとなりました。文化財講座は四月二四日の「獅子舞の見かた・調べかた」と一九八九年一月二一日の「仏像の見かた・調べかた」のみ実施し、あと四回は取り止めになりました。史跡散歩会は、九月二五日と一〇月二三日に「豊島の庚申塔をたずねて」を行いました。

刊行物は報告書、目録、研究紀要・年報がすべて発行できなくなり、館だよりも半減して二号の発行のみとなりました。

収蔵資料の整理・保存については、春の旧宜教師館付属棟収蔵資料の燻蒸に引き続き、一〇月には、資料館収蔵資料の燻蒸と整理を行いました。このため、一〇月四日から二八日まで臨時休館しました。準備期間を置いて、一二日から一四日までの三日間、資料の燻蒸をし、休館期間の後半は集中的に整理作業をしました。それ以降引き続き、今年度いっぱい資料整理を続けています。図書資料の整理も重点的に進めています。特別展を開催し、多くの資料が提供された学童疎開関係の文献も整理しました。今年度は整理に重点をおいていたため、歴史生活資料所在調査はもとも今年度はやらないことにしていました。

文化財については、埋蔵文化財の調査に取り組んだほか、庚申塔について文化財登録のための調査を実施し、長崎獅子舞については、文化財保護審議会委員の中村たかを先生を中心とする長崎獅子舞調査会に委託し、あしかけ四年間にわたる調査が開始されました。

かたりべ

No.14

1989年3月4日
発行

豊島区立郷土資料館

豊島区西池袋2-37-4

電話03-980-2351